

江戸前期における中国医書の受容と医者像

——『格致余論』を中心に

熊野弘子

The Acceptance and Doctors' Stances of Chinese Medicine in the Early Edo Period, Focusing on *Gezhi yulun*

KUMANO Hiroko

Many Chinese books reprinted in Japan and annotated books of Zhu Zhenheng's *Gezhi yulun* were published and accepted in the early Edo period. This paper focuses Doi Kaku's *Kakuchiyoron tosyō* that is a Chinese book reprinted in Japan with headnotes, Genpaku Hirota's *Kakuchiyoron sosyō* and Ippo Okamoto's *Kakuchiyoron genkai* that are annotated books of *Gezhi yulun*, and considers how *Gezhi yulun* was accepted in Japan by weighing the explanatory comments of the three books. As a result, the two former books commented to cite old Chinese texts, the latter book commented clinically. This paper showed different doctors' stances and a part of circumstances surrounding acceptance of Chinese medicine in the Edo period.

キーワード：中国医学、『格致余論頭書』、『格致余論疏鈔』、『格致余論諺解』

はじめに

日本では、江戸時代、医と儒を兼ねる儒医が多く存在し、さまざまな医書、特に中国医書を読みこなして、そこから注を施したり医書を著したりする者は、儒学をはじめとする漢学を身につけていた。朱子学などの宋代のみならず、先秦・漢代の思想までふまえていないと中国医書は読めないと見え、江戸時代の名だたる中国医書の注解書には先秦・漢・宋代などのさまざまな書が引用されている。

江戸時代に流布した中国医書の代表の一つとして朱震亨（1281-1358）の『格致余論』（1347年成立）があげられる。震亨の学説はかの曲直瀬道三（1507-1594）が取り入れ日本で普及した。また、この書は江戸時代、特に前期に数多く和刻本および注釈本が出版されており¹⁾、日本でよく読まれたことが窺える

1) 本稿では、和刻本は準漢籍（漢籍）、中国医書を題材に日本人が注解している「注釈本」は国書つまり和本として取り扱う。注19、20参照。

ことから、日本の医学界への影響は大きかったといえよう²⁾。そして、原文以上に時として重要である解釈、批評、版本が日本・中国双方において多いこともそれを裏付けよう。このように『格致余論』は近世文化史上、医学を論じる上で欠かせない位置にある。

朱震亨は、字は彦修、通称は丹溪、婺州義烏（浙江省）の人で、医学における金元四大家の一人である。震亨は『格致余論』序で、『黄帝内経』は意義深いものであり、儒者にしか読めないと述べているように、『黄帝内経』をはじめとする医書の読者である医者像が震亨によって定められていたのである。『格致余論』は『黄帝内経』を重視し、また周敦頤・朱熹などの宋代の思想や易の説を採用し、儒説を取り入れているのが窺える。とりわけ、『格致余論』養老論篇は他篇よりも諸文献の引用が多い。

そして、和刻本・注釈本の『格致余論』養老論篇における注解においても『格致余論』の原文以上にさまざまな文献からの引用が見られるのであるが、しかしその注解を考察したものは少なく、江戸時代における『格致余論』がどのように理解され、どこが着目されたのか、医学的な内容、および儒医が多かった当時における儒教をはじめとするさまざまな思想にまで踏み込んだ研究はさほどないといえよう³⁾。

そこで本稿では、『格致余論』の考えを日本人はどのように解釈していたのか、養老論篇を中心に『格致余論』の江戸時代における受容を考察する。

具体的には、まず『格致余論』受容の一つの現れである和刻本・注釈本の版本について書誌学的情報をふまえておく⁴⁾。次に、『格致余論』養老論篇を取り上げ、そこへ日本人が付した注解に焦点をあて、確たる理論理解にまでふみこんで『格致余論』解釈を考察することによって、その受け入れ方や注解者であった医者の医学観およびスタンスを見るとともに、医者像そのものを浮き彫りにする。それにより、江戸時代における中国医学の受容の一端を明らかにしたい。

2) 江戸時代、和刻本『格致余論』の和刻回数は13回と中国医書のなかで6番目、江戸初期に限れば11回と3番目に多かったことから普及程度が大きかったことが窺える。和刻と江戸時代の医学を論じたものは、真柳誠「江戸期渡来の中国医書とその和刻」（山田慶児・栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』思文閣出版、1997年）が詳しい。

3) 日本の和刻本・注釈本を直接考察したものではないが、長谷部英一他『朱震亨『格致余論』訳注』（朱震亨読書会、2007年）において『格致余論頭書』・『格致余論診解』が参照されている。

日本でどのように受容・解釈されたのかを考察する前段階として、拙稿「江戸時代における中国医学受容背景の研究動向——『格致余論』を中心に」（『千里山文学論集』第82号、2009年）において、当時の儒医を取り巻く環境に関する先行研究および『格致余論』に関する先行研究に触れた。

4) 『格致余論』和刻本の書誌情報については、真柳誠「『格致余論』『局方發揮』解題」（『和刻漢籍医書集成』第6輯、エンタプライズ、1989年、45-53頁）、小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』（大修館書店、1999年）により、また、『格致余論』を所収する叢書『東垣十書』の書誌情報・版本系統については真柳誠「『東垣十書』解題」（同『和刻漢籍医書集成』2-18頁）により考察されているが、さらに管見に及んだものや目録などにより筆者が補充し、また注釈本については調べた。

江戸の書誌学他について、真柳氏より多大なる教示を得た。

一 江戸時代における『格致余論』諸版の出版

1 日本で出版された和刻本・注釈本

江戸前期は医書の導入、翻刻に力が注がれていたが、江戸中期に入ると、日本人による独自の注解・研究書が次々と著されるようになり、江戸後期は考証医学が隆盛した。江戸前期のそうした状況は下記表が示す通り『格致余論』という一つの医書にもあてはまる。

『格致余論』は単行本のみならず、『東垣十書⁵⁾』や『医家七部書』にも所収されている。現存する和刻本『格致余論』は26種であり、詳細は以下の通りである。

表1 『格致余論』和刻本の版本データ

	年	書誌情報	版本系統	所蔵
(1)	1597・慶長2	京都・小瀬甫庵刊 ⁶⁾ 。古活字『東垣十書』本	遼潘第3版(1529)底本	京都府立図書館
(2)	慶長間・1596-1614	古木活字印本。1冊。昌平饗旧蔵。毎半葉12行19字		宮内庁書陵部
(3)	元和間・1615-1623	古活字印本		大阪府立図書館、天理図書館、久原文庫
(4)	元和・1615-1623頃	古活字『東垣十書』本	医統正脈本(1601)底本	
(5)	江戸初期・慶長～元和間	古活字本。1冊。12行20字		大東急記念文庫
(6)	寛永間・1624-1643	古活字本。12行17字		
(7)	寛永・1624-1643頃	『東垣十書』本。刊者不祥。(1)本に返り点・送り仮名付す	(1)の覆刻	京都大学人文研図書館、京都大学富士川文庫、研医会図書館
(8)	1630・寛永7	敦賀屋久兵衛刊		
(9)	1641・寛永18	1巻1冊。京都・風月宗知刊。10行20字	→ (10)	武田科学振興財団杏雨書屋、関西大学図書館、九州大学附属図書館医学図書館、八戸市立図書館、名古屋大学医学部史料室
(10)	1645・正保2	1巻1冊。出版者無記名。10行20字	(9)の翻刻 → (11) → (12)	武田科学振興財団杏雨書屋、東京大学総合図書館、九州大学附属図書館医学図書館、国文学研究資料館、筆者所蔵

5) 『東垣十書』に関して、真柳誠「『東垣十書』解題」（『和刻漢籍医書集成』第6輯、エンタプライズ、1989年）2-18頁参照。なお、『東垣十書』所収の医書は以下の通り。『脈訣』『内外傷弁惑論』『脾胃論』『蘭室秘蔵』『湯液本草』『此事難知』『格致余論』『局方發揮』『外科精義』『医経溯洄集』。

6) 名は道善、号は甫庵。1564-1640。江戸前期の儒医。医を業として豊臣秀次に仕えた。『信長記』・『太閤記』の著述で知られる。

(11)	1648・慶安元	1巻1冊。 京都・林甚右衛門刊	(10)の重印	東京大学総合図書館、国立国会図書館、静嘉堂文庫、都立日比谷図書館、金沢大学図書館、蓬左文庫
(12)	1649・慶安2		(10)の重印	研医学会図書館、九州大学附属図書館医学図書館
(13)	1658・万治元	2巻。 京都・武村市兵衛刊。 『東垣十書』32巻20冊。第7冊	王肯堂校訂本（1601-13）底本 → (20)	武田科学振興財団杏雨書屋、大阪府立図書館、京都大学附属図書館、東京大学医学図書館、千葉大学附属図書館、東北大学附属図書館、国立国会図書館、台湾国立中央図書館
(14)	1660・万治3	京都・敦賀屋久兵衛刊		北京・中医研究院図書館
(15)	1665・寛文5	『格致余論頭書』 2巻2冊。頭注本。 賀久道意注 ⁷⁾ 。 京都・村上勘兵衛刊。本文部分：9行15字		武田科学振興財団杏雨書屋、東北大学附属図書館、神宮文庫、研医学会図書館、早稲田大学図書館、名古屋市立大学図書館田辺通文庫、沈陽・中国医科大学図書館、筆者所蔵
(16)	1666・寛文6	4冊。 京都・村上勘兵衛刊		鶴見大学図書館
(17)	1669・寛文9	1冊。 中村五兵衛刊。 9行18字		神宮文庫、横浜市立大学医学情報センター、東洋文庫、筆者所蔵
(18)	寛文間・1661-1672	中村五兵衛開版		
(19)	1681・延宝9	橋本屋長兵衛刊	→ (26)	
(20)	1659・万治2-1688・元禄元 間	2巻。 京都・山本長兵衛印。『東垣十書』20冊。第7冊	(13)の重印 → (21) → (24)	東京医科大学図書館、金沢市立図書館
(21)	1689・元禄2	1巻1冊。日本田窮軒校点。京都・芳野屋徳兵衛刊。『医家七部書』所収	(20)の重印	国立国会図書館、東京大学総合図書館、九州大学附属図書館医学図書館
(22)	1692・元禄5	1巻1冊。 秋田屋清兵衛開版。 全文振仮名付本	→ (23)	武田科学振興財団杏雨書屋、東北大学附属図書館、研医学会図書館
(23)	1692・元禄5	井筒屋六兵衛刊。 全文振仮名付本	(22)の重印	
(24)	1694・元禄7 後刊	『医家七部書』所収	(20)の重印	北里東医研書庫

7) 生年不祥、1695年（元禄8）没、医者であった。

(25)	1760・宝暦10	1巻1冊。 太田又右衛門刊		北京・中国中医研究院図書館、北京・中国医学科学院図書館、長春・吉林大学白求恩医学部図書館
(26)	江戸刊	1冊。 京都・川勝又兵衛刊。 批注あり	(19)の重印	慶応大学医学情報センター、東北大学附属図書館、九州大学附属図書館医学図書館、北京 大学図書館、大連市図書館

また、『格致余論』への日本人の注解による和書すなわち国書の注釈本として以下の7種11冊が挙げられる。

表2 『格致余論』注釈本の版本データ

(27)	1626・寛永3	『格致余論鈔』 1冊。著書未詳。 梅寿刊 ⁸⁾ 古活字版。		
(28)	1636・寛永13	『格致余論鈔』 5巻5冊。著書未詳。 大阪・敦賀屋九兵衛刊		武田科学振興財団杏雨書屋、北海道大学文学 研究科文学部図書室
(29)	1644・寛永21	『格致余論鈔』 5巻5冊。著書未詳。 京都・敦賀屋久兵衛刊	→ (30)	武田科学振興財団杏雨書屋、京都大学富士川 文庫、東京大学図書館
(30)	1660・万治3	『格致余論鈔』5巻5冊。著 書未詳。京都・敦賀屋久兵 衛刊 ⁹⁾ 。13行字数不定	(29)の自家 版に入木	千葉大学附属図書館、東北大学附属図書館狩 野文庫（5巻2冊）、北京・中国中医研究院図 書館
(31)	1679・延宝7 序刊	『格致余論疏鈔』 8巻8冊。 広田玄伯（一松軒）。 京都・平安書林西村市郎右 衛門刊。 大字7行細字14行18字		大阪府石崎文庫、早稲田大学図書館、九州大 学附属図書館医学図書館、日本大学医学部図 書館、鶴見大学附属図書館、武田科学振興財 団杏雨書屋（3冊）、慶応大学富士川文庫（2 冊）、京都大学富士川文庫（巻1・2・6・ 7）、北京・中国中医科学院図書館、上海図書 館、南京図書館、筆者（巻2-8）所蔵
(32)	貞享・1684-1687頃	『格致余論講義』1巻1冊。 松岡玄達 ¹⁰⁾ 。写本		龍谷大学写字台文庫 ¹¹⁾

8) 医者梅寿については、川瀬一馬「梅寿軒の医書開版について」（『書誌学』復刊新9号、1967年）参照。

9) ここに挙げた37種のうち京都・敦賀屋久兵衛刊本が3種あるが、大阪・敦賀屋九兵衛とは異なる。渡辺守邦・柳沢昌紀「敦賀屋久兵衛の出版活動」『江戸文学』第16号、1996年、のち中野三敏監修『江戸の出版』（ペリかん社、2005年）所収、248、270頁。

10) 字は成章、通称恕庵、怡顔齋と号した。1668（寛文8）-1746（延享3）。岡本一抱と同門であった浅井周伯（1643-1705）や、加賀藩の医官稲生若水（1655-1715）の門下であったが、本来は山崎闇齋や伊藤仁斎に学んだ儒者であった。

11) 玄達の書については、大木彰「松岡玄達自筆本と写字台文庫」（『龍谷史壇』第124号、2005年）、山田慶兒「浅井周伯の養志堂の講義録——松岡玄達自筆本再考」（『東と西の医療文化』思文閣出版、2001年）、大庭脩「松岡玄達書写資料」（『江戸時代における中国文化の受容』所収、同朋社、1984年）205-208頁。

(33)	1696・元禄9 自序刊	『格致余論診解』 7巻7冊。岡本一抱 ¹²⁾ 。京 都・西村市郎右衛門、京 都・西村九左衛門、神田・ 西村半兵衛刊。大字9行細 字18行20字	→ (34)	武田科学振興財団杏雨書屋、東京大学図書館 鵜軒文庫、東北大学附属図書館、九州大学附 属図書館医学図書館、神宮文庫、刈谷市中央 図書館、船橋市西図書館、千葉大附属図書館、 学習院大学日本語日本文学研究室、筆者所 蔵 ¹³⁾
(34)	江戸中期 (1696・元禄9後刊)	『格致余論診解』7巻2冊。 岡本一抱。京都・中村茂兵 衛刊	(33)の後印	鶴見大学図書館
(35)	1715・正徳5	『格致余論備考』2巻2冊。 香月牛山 ¹⁴⁾ 。写本		神宮文庫
(36)	未詳	『格致余論講解』 1冊。著書未詳。写本		岩瀬文庫
(37)	未詳	『格致余論私考』 1冊。著書未詳。写本		九州大学附属図書館医学図書館 ¹⁵⁾

以上が『格致余論』和刻本・注釈本の版本上の考察であるが、これらを基礎に以下書誌について述べていきたい。

- 12) 岡本一抱、名は伊恒、号は一得斎、通称は為竹、本性は杉森氏。1655年（明暦元）頃－1716年（享保元）。父は杉森信義、母は越前藩医、岡本為竹法眼受慶（二世為竹）の娘である。長兄は智義こと杉森市左衛門、次兄は信盛こと近松門左衛門（1653-1724）である。一抱は三男にあたり、三世為竹を襲名している。1685年（貞享2）刊書から岡本一抱子、1996年（元禄9）春頃、法橋位につき為竹と号するが、この『格致余論診解』からは法橋岡本為竹一抱子という署名で、次々に医学診解書などの書物を著した。当時、高名な医者であったことが窺える。一抱は味岡三伯の高弟であり、同門の浅井周伯・井原道閑・小川朔庵と並んで名声があり、世に味岡家の四傑と称せられていた。一抱の伝記は、長友千代治「近松弟岡本為竹一抱子」（『国語国文』第44巻第9号、1975年、48-63頁）が信頼に足る。
- 13) 同じ7巻でも4冊本である、また筆者所蔵のもの（26.5×18㎝）とサイズが違うなど形態が異なるものは逐一所蔵機関に挙げていないが、元禄9自序刊『格致余論診解』を所蔵する機関は多い。
- 14) 字は啓益、通称貞庵、牛山人または被髮翁と号した。1656（明暦2）－1740（元文5）。医師であり儒者であった貝原益軒（1630-1714）に儒を学び、また益軒の主治医でもあった。医は藩医鶴原玄益に学び業とした。李朱医学、なかでも李杲（1180-1251）の医説を奉じ、江戸中期の後世派の第一人者とされた。
- 15) 注4所掲論考のほか真柳誠「日本の医薬・博物著述年表（1）」（茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』第1、3-5号、2006-08年）、薛清録『中国中医古籍総目録』（上海辞書出版社、2007年）、国文学研究資料館編『古典籍総合目録——国書総目録続編』（岩波書店、1990年）、『補訂版国書総目録』（岩波書店、1989年）、奥野彦六『江戸時代の古版本』（臨川書店、増訂版、1982年）、東京大学総合図書館『東京大学総合図書館漢籍目録』（東京堂出版、1995年）、山本仁『東京大学総合図書館準漢籍目録』（東京堂出版、2008年）、財団法人武田科学振興財団『杏雨書屋蔵書目録』（臨川書店、1982年）、京都帝国大学附属図書館『富士川本目録』（1942年）、宮内庁書陵部『和漢図書分類目録』（1953年）、『東北大学所蔵和漢書古典分類目録子部集部』（1975年）、『静嘉堂文庫国書分類目録』（1929年）、神宮司廳『神宮文庫所蔵和書総目録』（2005年）、大阪府立図書館『石崎文庫目録』（1968年）、黒田源次『中国医学書目』（文海出版社、1931年）など各種目録他を参考とした。

2 和刻本・注釈本の書誌

表1と2に掲載した和刻本・注釈本37種の内、いくつか重要と思われる書誌について述べたい¹⁶⁾。以下に示す各番号は表1・2のものである。

(5) 江戸初期古活字本は、無刊記本である。双辺、無界、大黒口。眉上および附箋に漢籍の引用書き入れが極めて多い。朱墨（句読・朱引）、黒墨（訓点）両点を附し、前表紙には「中迪之」の三字がある。点は曲直瀬道三の説、中迪は道三の門人で、師説に従って加点したものとされる。啓廸院講説書の一つである¹⁷⁾。

(7) 寛永頃刊『東垣十書』本は、小瀬甫庵古活字本に加点、覆刻で整版に改めたものである。

(13) 1658年（万治元）『東垣十書』本は、当版の底本に王肯堂校訂本（万暦29年序吳勉学刊古今医統正脈全書本）が用いられており、これら識語と刊記の刻入、および罫線を除去している点を除けば、ほぼ忠実に翻刻されている。『倭板書籍考』によると、滝野元敬が倭訓を加えている¹⁸⁾。

(20) 1659年（万治2）-1688年（元禄元）間『東垣十書』本は、(13) 1658年（万治元）武村版を重印したもの。『外科精義』末の武村市兵衛の刊記を削り、同部と『局方發揮』・『格致余論』末の三か所に「山本長兵衛新版」と刻入している。しかし、それ以外に修刻した部分は見えず、本質的には同一の版である。この(20)本は、のちに『医家七部書』というさまざまな医書の版本を集めて印刷した叢書が二種出版され、一つは山本長兵衛の刊記を付けたままの『格致余論』・『局方發揮』・『溯洄集』を入れる(24)本であり、一つはそれらの刊記が、1689年（元禄2）芳野屋徳兵衛に彫り直されている(21)本である。

(10) 正保2年本は、(9) 寛永18年本を翻刻したものである。『杏雨書屋蔵書目録』では曲直瀬玄淵批注本となっている。四周双辺、無界、白口、上黒魚尾、美濃本小判より横17糎と短く、匡郭内縦19.2横13.4糎。63丁。実見した(15) 寛文5年本ほど文字に濃淡はないものの、(17) 寛文9年本ほど印刷は鮮明ではない。実見した本は保存状態が良い方だと思われ、欄上、欄脚、書脳に蟲損が見られるものの、さほど本文には見られない。欄外、特に眉上への書き入れが多数見られ、文中には朱墨で書き入れがなされている。それら書き入れには、『黄帝内経』などの医説が書かれることが多いが、また『孟子』や『礼記』、『莊子』に関するものもある。特に『格致余論』の主要な部分である「相火論」の箇所への書き入れは非常に多く、所有者に丹念に読まれた跡が窺え、相火論が注目されていたことが分かる。

(9) 寛永18年本は(10) 正保2年本に翻刻されており、当然両者の加点は同じであることから、『杏雨書屋蔵書目録』ではその旨は記載されていないが、この本も曲直瀬玄淵批注本といえよう。四周双辺、無界、白口、上黒魚尾、匡郭内縦19横13.3糎。この本も、実見した(15) 寛文5年本ほど文字に濃淡はないものの、(17) 寛文9年本ほど鮮明ではない。筆者実見の本では、所有者だった者の書き入れは書の前半に散見される程度である。『孟子』に関する書き入れもあるが、ほとんどは『黄帝内経』に関する書

16) (9) (10) (15) (17) (31) (33) 本は実見に及ぶ。(7) (13) (20) (21) 本に関しては、注4所掲真柳論考2-18頁参照。

17) 長澤規矩也『大東急記念文庫貴重書解題 第1巻総説・漢籍』（大東急記念文庫、1956年）76頁。

18) 寺島宗意『倭板書籍考』京都木村市郎兵衛刊、1702年（元禄15）、（長澤規矩也他編『日本書目大成 第三巻』所収、汲古書院、1979年）36頁。

き入れなど医説にちなんだものである。実見の(10)正保2年本に比し、『格致餘論』の主要篇となる相火論篇への書き入れは一切なく、所有者に読まれ、興味をもたれたのか不明である。58葉までであるが32葉裏以降、欄外などへの書き入れが一切ない。

(15) 寛文5年本は単なる和刻ではなく、鼈頭注本と称されるもので、賀久道意により詳しい注が付けられている。別名は『格致余論頭書』・『格致余論首書』・『鼈頭評注格致余論』である。注釈本として国書にも該当するのではないかと思われるほど注が多い¹⁹⁾。

頭注には漢籍の引用が多い。本文同様に注文も漢文で書かれており、ともに訓点を加えられている。四周単辺、無界、白口、黒魚尾、美濃本小判、匡郭内縦24横17.4糎。47+46丁。筆者実見の本には、文字の墨付きに濃淡部分がままた見られる。なお、朱筆の書き入れや、朱線・朱枠などの符号が多く用いられるなど朱引が頻繁に見られ、また、大量の書き込み附箋が糊付けされており、丹念に読まれたあとが窺える。書脳などに多少蟲損がある。

(17) 寛文9年本は、4周単辺、無界、白口、下黒魚尾、美濃本小判、匡郭内縦19.3横15.5糎。76丁。実見した(9)寛永18・(10)正保2・(15)寛文5年本に比し、文字に墨つきの濃淡はあまりなく、極めて印刷が鮮明である。筆者実見のものに関する限り、保存状態は良いとはいえず、書脳、欄脚をはじめとして蟲損が散見される。所有者による書き入れは一切見あたらない。

(31) 延宝7年『格致余論疏鈔』は、四周単辺、無界、白口、黒魚尾、美濃本小判、匡郭内縦19.4横15糎であるが、丁により多少異なる。文字の墨つきに濃淡が見られる。本文・注文ともに訓点を加えられた漢文である。

(33) 元禄9年『格致余論諺解』は、四周単辺、無界、白口、魚尾なし、美濃本小判、匡郭内縦20.7横17糎。29+19+24+24+31+27+22丁。7巻全176丁。紙は透けるほど薄く、文字の墨付きに多少濃淡が見られる。本文は訓点を加えられた漢文であるが、注文は片仮名交じりである²⁰⁾。

以上、書誌学的情報から江戸時代における『格致余論』の受容状態を確認した。『格致余論』は中国において明代に反論をとる者が出て²¹⁾、次第に読まれなくなったのと同様に、日本においても読まれな

19) これは和刻本の定義の問題とも関わろうが、長澤規矩也氏は「本文が漢籍ならば……頭注が仮名交じり文であっても、欧文であっても漢籍にすることにした。……旁注がついていても、評語が加えられていても、加注・加評の位置の差ということで漢籍扱いとする。読み仮名を振ったものは、特に別の書名がついているもの以外は一応漢籍とする」と述べており(和刻本の定義は、長澤規矩也『古書のはなし』(富山房、1976年)7頁参照)、これに従うなら、この書は書誌学上、和刻本漢籍に分類される。

また、小曾戸洋氏は「和刻漢籍医書出版年表」において「国書と漢籍は厳密に区別しがたいものもある。日本人の注釈が付されたものなどがそうである。程度によりけりではあるが、原則的に日本人の注解は国書とみなして採らなかつた」(注14所掲小曾戸論考、436頁)と述べ、同書年表にこの寛文5年本『格致余論』を和刻本として掲載している。

20) この(33)『格致余論諺解』や(31)『格致余論疏鈔』は、長澤氏が述べるところの「別の書名」がついており、また小曾戸氏が述べるところの「日本人の注解」であるので、国書すなわち和書と分類した。前注参照。

21) 明初は洪武帝により御医に任命された戴思恭(1324-1405)、そして虞搏(1438-1517)、汪機(1463-1539)などにより朱震亨の学説は尊崇されていた。しかし、次第に異論をとる者が出てきた。兪弁は『統医説』(1522成立)で『格致余論』を認めつつも、疑義を差しはさんでいる。明末になると、張介賓(1563頃-1640頃)は当初、震亨の

くなっていったようである。和刻本・注釈本合わせ、確認できる最後の刊行年は（25）1760年（宝暦10）和刻本である。そして、その前のものとなると、香月牛山の（35）1715年（正徳5）『格致余論備考』写本である。それ以外の刊行年が明確なものに関しては全て1600年代のものばかりであった。

岡本一抱の（33）1696年（元禄9）刊『格致余論諺解』、そして一抱と同じく味岡三伯の弟子であった浅井周伯の弟子、松岡玄達の（32）貞享（1684-87）頃刊『格致余論講義』がいわゆる金元医学の受容のピークであったのだろう。そして、1600年代末に書かれたこれら二書から、1715年の香月牛山『格致余論備考』までが『格致余論』受容の成熟期といえよう²²⁾。

これ以降、日本において、田代三喜、その弟子の曲直瀬道三のときより大いに盛行していた震亨の説は下火になっていった。一派の系譜はさらに曲直瀬玄朔 — 饗庭東庵 — 味岡三伯 — 岡本一抱へと連なるが、石田秀実氏が「東庵一派の医学は、日本における中国医学受容の、最も深いレベルを示すものである²³⁾」と述べるとおりなら、また『格致余論』受容と中国医学の受容状態は重なっていたといえるであろう。

日本における『格致余論』受容の下降原因として、江戸の社会背景を考えると、江戸以前よりもたらされていた蘭方医学の存在、すなわち新医術の存在は無視できないだろう。そして、明代の反論に代表されるように、震亨の理論そのものに脆弱さを含有していると判断された可能性も否定できない。

しかし、なにより震亨理論や蘭学に起因するところ以上に、やはり医学分野のみならずさまざまな分野で、鎖国が進み、自国の文化が花開いていった時代要因が大きいだろう。江戸時代は、中期以降、日本独自の医学が発達してゆくのである。

その過程で、複雑な中国医学理論というのが敬遠されていくという歩みを進めていったのである。その歩みを強力に推進した吉益東洞（1702-1773）は、当時盛行していた金元医学を信奉する後世家医方を否定したのである。

しかしながら、後世派医方を定着させた曲直瀬道三はそもそも李朱医学を日本化させて治療に応用していた²⁴⁾。だが、香月牛山の師の貝原益軒は、医学書というよりは養生書という位置付けではあるが、いまだに刊行される『養生訓』を日本人大衆に向けて、日本化して著し、吉益東洞は徹底的に医学を日本化した。

こうした日本人に合った治療とシンプルな治療体系が求められてきたという気運が、曲直瀬道三が中

「陽は常に余剰、陰は常に不足」とする説に賛同していたものの、後年この説に異をと見え、震亨の滋陰説を誤りとし、立場を変えた。「予自初年、嘗読朱丹溪陽有余陰不足論……余謂陽常不足豈亦非一偏之見乎。蓋以丹溪補陰之説謬」『景岳全書』陽不足再弁二十四。また清になると、尊経尚古の思想の持主である徐大椿（1693-1771）は宋以後の医学に批判的で、例えば運氣学説には反対している。

22) なお、江戸中期の後世派の第一人者であった香月牛山は、貝原益軒の儒学の弟子でありながら、主治医であったが、酒井シヅ氏によると「益軒の『養生訓』……は牛山の養育草より後にできている。牛山が益軒の影響を受けたのではなく、牛山の著作が益軒に大衆教訓書を書かせる動機になったかもしれない」（酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍、1982年、202頁）といわれている。現在なお刊行され読者を獲得し続けている『養生訓』と一時代を築いた『格致余論』は、対象とする読者層が異なるとはいえ、その後日本において明暗が分かれた結果となったといえよう。

23) 石田秀実「劉医方という誤解」（山田慶兒・栗山茂久編『歴史の中の病と医学』思文閣出版）143頁。

24) 曲直瀬道三の医学については、矢数道明『近世漢方医学史——曲直瀬道三とその学統』（名著出版、1982年）が詳しい。

国の理論をベースに日本向けにアレンジしたといった程度を超えたとき、『格致余論』は日本での役割を終えたのかもしれない。

ただ、のちに比べまだ独自の医学文化が開花しておらず、蘭方医学が台頭していなかった1600年代には日本において『格致余論』が大いに受容されていたことは、本稿の書誌情報が示す通り事実であった。

最も深い中国医学受容を示す一つとして、まず日本における『格致余論』の受容状況が『格致余論』和刻本・注釈本の書誌情報から確認できたと思われる。

二 『格致余論』 養老論篇の受容と解釈

1 解釈に用いた引用文献

これまで、和刻本・注釈本の書誌についてみてきた。この章では、現在所蔵機関が多く、すなわち残存数が多いことから、当時流布したと思われる三書を取り上げ、(33) 1696年(元禄9)岡本一抱『格致余論諺解』を中心に、(15) 1665年(寛文5)賀久道意注『格致余論頭書』・(31) 1679年(延宝7)広田玄伯『格致余論疏鈔』各注と比較検討してみたい。

その前段階として、本節では、『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』・『格致余論諺解』各養老篇の注に引用されている文献を比較し考察することで注釈の傾向を見たい。

『格致余論頭書』は、出現順に以下の書を引用している。なお書名の後の数字は引用回数であり、数字のないものは1回の引用である。

『礼記』14・『黄帝内経素問』5・『難経』・『古今韻会举要』・『秦定養生』・『山谷詩』・『孝経』・『論語』6・『文選』4・『漢書』4・『中庸』・『四書通義』・『事物紀原』・『佩文韻府』・『孟子』3・『周礼』・『医綱』2・『史記』2・『通考』・『大学章句』・『濟世全書』2・『性理字義』・『詩経』4・『広韻』・『礼部韻略(増韻本)』・『医林』2・『格致余論』「痛風論」篇・『居家秘用』・『老子』3・『五車韻瑞』・『秦定養生主論』・『国語』・『本草綱目』・『西山集』・『琅琊代醉』・『黄帝内経靈枢』・『荀子』・『近思録』・『匀会』・『四書大全』・『養老書』・『莊子』・『脾胃論』。

そして、書名ではなく人名を挙げて蘇東坡・孫真人すなわち孫思邈・許叔微・河間すなわち劉完素・李時珍の説を引用している。

『格致余論疏鈔』養老篇の注は、出現順に以下の書を引用している。なお書名の後の数字は引用回数であり、数字のないものは1回の引用である。

『礼記』9・『古今医統大全』2・『黄帝内経靈枢』7・『黄帝内経素問』8・『難経』2・『医綱本紀』5・『丹溪心法』・『万病隨症』・『傷寒論』・『飲中八仙歌』・『佩文韻府』2・『山谷詩』・『本草綱目』10・『広韻』・『釈名』・『孝経』・『論語』7・『文選』7・『儀礼』・『漢書』5・『中庸』・『四書通義』・『四書大全』4・『事物紀原』・『通典』・『周礼』・『史記』4・『古今韻会举要』4・『濟世全書』2・『孟子』・『性理字義』3・『詩経』3・『礼部韻略(増韻本)』・『医林²⁵⁾』2・『居家秘用』・『老子』3・『国語』・『統説

25) 「医林医綱共^二作^レ血^一多^キ」と記載されているが「医林」と名の付く書は多く、中国のものだけでも25ある。正確にはどの書を指すか不明である。

郭』・『春秋左氏伝』・『楊升庵集』・『鶴林玉露』・『荀子』・『近思録』・『大学』・『養老書』・『莊子』・『脾胃論』。

そして、人名を挙げて王好古（2回）・陶弘景・孫思邈の説を引用している。

これらに対し『格致余論諺解』の注は『黄帝内経素問』・『難経』・『孟子』・『医綱本紀』・『医林』・『老子』・『礼記』・『古今韻会挙要』などが引用されてはいるものの、先に見た2書に比し非常に少なく、一抱の注解が多く見受けられる。字義的な解説がなくもないが、医学的な解説が圧倒的に多く見受けられる。

2 和刻本・注釈本各注に見える解釈と医者像

以上、注における引用文献の書名を見てきたが、次に『格致余論』における実際問題として注解を個々に見ていき、その内容や注解者である医者像を明らかにして、医学思想史上における意義を問いたしたい。

さて、三種の注解書の原本である『格致余論』養老篇には²⁶⁾、

人生至六十、七十以後、精血俱耗、平居無事、已有熱証（『格致余論』養老論、7a）

（人は六十、七十歳以後になると、精も血も尽きてしまい、普段何ということがなくとも、すでに熱証がある。）

とあり、続いて、頭がはっきりせず、忘れっぽい、耳が聞こえない、歯や髪が抜け落ちるなど、その他現れるさまざまな症状は「老境であれば誰もがそうである（老境、無不有此）」と述べられる。

震亨の説は、体内において陰は不足しがちであり、陽である火が強くなる傾向があるとする相火論に特徴があるが、老境における病気にもその説を当てはめている。つまりは、陰は失われてその結果、熱証という病の状態であると論が導かれる。震亨によれば、老境になると次のような状態になると述べられる。

陰不足以配陽、孤陽幾欲飛越、因天生胃氣尚爾留連、又藉水穀之陰、故羈縻而定耳。所陳前証、皆是血少。内経曰、腎惡燥。烏附丹劑、非燥而何。（『格致余論』養老論、8a）

（陰は不足して陽に配当できるほどあるわけではなく、単独となった陽気は幾ばくか飛んでいきがちになるが、天生の胃気によってまだそこに留まろうとし、また、水穀の陰気の力を借りる。ゆえに人の体につながりとめられているに過ぎない。前に述べた証は、みな血が少ないことによる。『黄帝内経』に「腎は燥をきらう」とある。烏附丹劑は燥でなくて何であろうか。）

陰と陽は古来相対する関係であるとされ、例えば『白虎通』に「陰陽相對の義²⁷⁾」と説かれており、

26) 本稿では、次のバージョンを使用する。明王肯堂輯、明吳勉学校、万曆29年序、清光緒刊『古今医統正脈全書』本影印『百部叢書集成』所収『格致余論』。なお、『格致余論』は口語文が多いため、現代日本語訳を付けた。

27) 「陰陽相對之義也」『百部叢書集成』所収抱経堂叢書、班固撰『白虎通』卷4、1葉。

それは身体においても同様なのであって、陰陽の消長平衡・転化・互根といった働きは重要である。そうした本来の姿から離れた陰陽は不均衡を生じる。それが体内で起これば、すなわち身体の不均衡である。

しかし、身体に確かにあるか否かで寿命の判別ができるほどに身体にとっては重要である天生の、すなわち天から生じた先天の胃気がまだ体内に残存しておれば、体内の陰陽が不均衡であるにも関わらず、まだ寿命は尽きない状態である。

その重要なはたらきを担う天生の胃気によって孤陽、すなわち相対する陰が不足し単独となった陽は身体にとどめられる。そしてさらに、飲食の陰気の、すなわち後天の力を借り、単独となった陽がかろうじて身体につながとめられている状態、つまりは天与のものと後からの努めにより体内に孤陽を留める状態、これが老境であると述べられる。

朱震亨の説によれば、こうした老境の病は、陰である血が少ないことに起因する。また、老境とともに衰えていく腎にとって燥の状態はよくないことを『黄帝内経素問』を引用して説明し²⁸⁾、薬や食物の性質いかんによっては摂取に気を付けるべきと注意を促している。

この『格致余論』の文に対して、『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』・『格致余論諺解』はどのように解釈をしているだろうか。

上述引用文の「陰不足以配陽」に、『格致余論諺解』は以下のように注を付けている。

六七十ノ後ハ。陰気衰へ。陽気^{タカフリ}亢テ陰ガ陽ト配合スルニ不足トナリ（『格致余論諺解』巻2、12a）
（六十、七十歳以後は、陰気は衰えて陽気が亢進し、陰が陽と配合できないほどに不足となる。）

続けて、「孤陽」に次のように注が付けられている。

陰衰テ陽^{ヒトリ}孤ナルヲ云（『格致余論諺解』巻2、12a 以下同）
（陰は衰えて陽のみとなることを云う）

『格致余論』において、この陰陽概念は重要と思われるが、しかし『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』双方において、これらの箇所には注は付されていない。

次に、上述引用文中の「幾欲飛越」に、『格致余論諺解』は以下のように注を付けており、一抱の意見が窺える。

飛越ハ。飛揚散越ノ義也。凡ソ陽ハ陰ヲ以テ^{ヲサメ}取テ飛越セシメザル也。然ルニ今陰衰エテ不^レ取メ故ニ獨陽幾^ト飛越セント欲スルナリ（『格致余論諺解』）
（飛越は飛揚散越の意義である。そもそも陽は陰を収蔵していれば飛越させられないのである。しか

28) 「五蔵所悪、心悪熱、肺悪寒、肝悪風、脾悪湿、腎悪燥。是謂五悪」『黄帝内経素問』宣明五氣篇、「五悪、肝悪風、心悪熱、肺悪寒、腎悪燥、脾悪湿、此五蔵気所悪也」『黄帝内経靈樞』九鍼論篇。

し今、陰は衰えて収蔵されていない。それ故に、陽のみが飛越しがちになるのである。）

それに対し、『格致余論疏鈔』は「飛越」の注に『文選』を引用している。

文選三十四^二枚叔^カ曰^ク精^ノ神^ノ越^シ百^ノ病^ノ咸^ク生^ル注ニ云ク呂氏春秋曰ク精^ノ神^ノ勞^{スル}ナハ則^チ越^ス高誘云越^ハ散也
 （『格致余論疏鈔』巻3、22a）

（『文選』巻34枚叔に「精神が越出すれば百病はことごとく生じる」とある。李善は「『呂氏春秋』に「精神が疲労すれば越す」とある。高誘は「越は散である」と述べる」と注を付す。）

『文選』のこの箇所は「精神越滯百病咸生。善曰、呂氏春秋曰、精神勞則越。高誘曰、越散也。鄭玄毛詩箋、滯発也²⁹⁾」であるが、しかし『格致余論疏鈔』は「鄭玄毛詩箋、滯発也」までは引用せず、その代わり「精^ノ神^ノ越^シ」と記載し、鄭注まで目配りしていることを示している。

だが、実は、現存の伝本で「精神勞則越。越散。」と確認できるのは、『淮南子』主術訓であり³⁰⁾、畢沅、許維適など清朝考証学者によって校訂されるまでの長い間、本文・高誘注ともかなりの乱れを生じた『呂氏春秋』には見られない。つまり、脱落した箇所といえよう³¹⁾。『呂氏春秋』の影響を受けた『淮南子』にのみこの文が見られるということにまで広田玄伯は出典確認をせず、『文選』の李善注をそのまま書き写しただけの可能性がある。

一方、『格致余論頭書』では「飛越」に注は付されていない。

先に引用した『格致余論』養老論篇にある「天生胃氣」に、『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』・『格致余論諺解』はともに『黄帝内経』を引用し、注を付けている。『格致余論頭書』は次のように注を付す。

五蔵別論云夫胃大腸小腸三焦膀胱此^ノ五^ノ者^ハ天氣之所^レ生也其氣象天故寫而不蔵（『格致余論頭書』巻1、12a）

（『黄帝内経素問』五蔵別論篇に「胃・大腸・小腸・三焦・膀胱、この五者は天氣を受けて生じたものである。その氣は天をかたどる。ゆえに寫して蔵することがない」とある。）

ここで述べられていることは、『黄帝内経素問』では胃をはじめとする五府ともいえるこれらは天の氣が生じたものであり³²⁾、よってその五府の氣は天と同様に泄瀉すなわち排泄して、腹蔵することがないと、飲食物を摂取した際の実際的な胃腸などの働きをもなぞらえて説明されている。なおこのことから、天とは寫出してためないものということがわかる。

29) 『四部叢刊』所収『六臣注文選』巻34、1-2葉。

30) 現行本『淮南子』において、「主術訓」を含む「高誘注13卷」にも許慎注が混入するが、本稿では、21巻本・莊逵吉本（1788年（乾隆53）序）、高誘注『淮南子』を用いた。巻9、16葉。

31) 陳奇猷は『文選』にみえるこの佚文について、蔣維喬などの「此の文及び注均しく淮南主術篇に見ゆ、誤引疑いなし」とする説を承けて注記する。陳奇猷『呂氏春秋校釈』（学林出版社、1984年）。

32) 本稿では、中国医学における五臓六腑を五蔵六府と記す。

そして、この注は『格致余論疏鈔』にも見られ、『格致余論頭書』を踏襲している。

一方、『格致余論諺解』には次のようにある。

五藏別論^ニ夫^レ胃大-腸小-腸三-焦膀-胱此^ノ五者^ハ天-気^ノ之所^ニ生^{スル}也ト。故ニ中焦胃気ヲ称シテ天^ノ生^{スル}ノ気ト云 (『格致余論諺解』)

(この五者は天气が生じるところのものである。ゆえに、中焦胃気は天生の気というのである。)

五府は天の気が生じたものであり、よって五府に含まれる中焦の胃気は天が生み出した気なのであると述べ、先行する二書の天をかたどる云々の解釈は省いており、そのまま踏襲するというスタンスを取っていない。

引き続き、先に引用した『格致余論』を見てゆく。「留連、又藉水穀之陰、故羈縻而定耳」に対して、『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』は「留連」と「羈縻」の出典に関する注をつけるのみである。

これに対して、『格致余論諺解』はそのような出典注を付けていない。「羈」や「縻」それぞれに簡便に語釈をする程度にとどめ、下記のように、

孤-陽飛-越セント欲^スト雖トモ。天-生^ノ胃気ニ因テ尚^テ暫モ其^ノ身ニ留リ連リ。又飲-食水-穀ノ陰気ニ籍^テ彼^ノ孤陽ヲ羈縻シテ。飛越ノ気収^リテ定マルト也 (『格致余論諺解』)

(孤陽は飛越しようとするといえども、天生の胃気のおかげで、なおしばらくはその身に留まっている。また、飲食による水穀の陰気によってその孤陽はつなぎとめられる。飛越の気は収まり定まるということである。)

と注を施す。身体から離れていこうとした単独の陽気は、天生・先天の胃気や後天の水穀の陰気のおかげで身体から飛び出すことなく収まり定留するといった解釈は、『格致余論』の内容を忠実に注解している。

続いて、先に引いた『格致余論』の「所陳前証、皆是血少」に対して、『格致余論頭書』や『格致余論疏鈔』は注を付していないが、『格致余論諺解』は、

六七十ノ老人ハ。陰衰^テ陽亢^{フル}ト如^シ此^ノ然^{レト}モ亦^タ丹溪所^レ陳^ル前^ヘノ頭昏目眇等ノ老証ハ。皆^テ是^レ陰-血少^{ナク}陽-熱旺^{サカ}ナル者タレバ。一切陽熱ノ物ヲ以^テ老人ニハ与^ヘラレマヂキト也 (『格致余論諺解』)

(六十、七十の老人は、陰衰えて陽たかぶることはかくのごとしであるが、また丹溪が先に述べた頭昏や目脂などの老証はすべて、陰血が少なく、陽熱が盛んだからである。一切、陽熱のものを老人には与えてはいけないということである。)

と注を付し、老境の病が、血が少ないことに起因するのを、朱震亨の主要な陰陽の説でもって解説し、養老論篇で強調される飲食物・薬の性質について言及しており、一抱はここで養老論篇の内容を要領よく

まとめている。

以上、三書の注を見てきたが、『格致余論頭書』は、スタンダードな文献を引用し、注を付けている。「頭注」形式という限られた余白内で、コンパクトに要領よく注が付されている。注の内容は医説が多いが、古典の内容、そして多少字義的な解説も見られる。先行する『格致余論鈔』を道意が見たかは不明であるが、この書は何回か版が重ねられており、当時、需要がありそれなりに流布したと思われるので、おそらく目にしたであろう。『格致余論頭書』の注解の分量はこの書より少なく、異国の医書を少し繙きたい場合にちょうどよい解説書たりえたと思われる。つまり、先行するものと差別化がはかられていた。また、臨床の現場では、ハンディなのが好まれる。こうした使い易さをも道意は意識していた可能性もある。これらのことより、需要があったのだろう、現在この書が所蔵される機関は多く、つまり残存数が多く、このことから当時多くの部数が刊行され、流布したと思われる。

『格致余論疏鈔』は引用文献が『格致余論頭書』に引かれる古典文献と重なっていることから広田玄伯は『格致余論頭書』を目にしたことが推測される。三書中もっとも文献引用が多いことから、先行研究のものに目配りしつつ、さらに、文献を猟渉したことが窺える。『格致余論頭書』・『格致余論諺解』に比べ、字義的解説が多い。字句に対し、詳細に古典などのさまざまな文献から引用をして詳細な注解をしており、玄伯は博識であったことが窺える。江戸後期に盛んとなる考証医学の兆しがすでにここに見られるといえよう。

しかしながら、のちの考証医学ほどの精緻さには及ばない。そして、注の内容の多くが文献引用であり、広田玄伯の意見や見解というものは少ない。また、医書の引用が多く、中国医学概念に言及している割に、臨床に即した内容は少ないといえる。他の『格致余論』の注解者は高名な医者が多いなか、玄伯に関してはいかなる人物か詳細は不明であり、医者としてより儒者としての比重が大きかった儒医という可能性も否定できないであろう。

『格致余論諺解』において一抱の解釈が多く見られるのに対し、玄伯自身の言葉で『格致余論』原文を解釈するという試みがほとんど見受けられないうえ、臨床的に有益なものともいいがたく、『格致余論諺解』に比べいささか精彩を欠く感が否めない。辞書機能を合わせもち、教養も身に付くといった程度の位置付けの医書といえる。しかしながら、この書は現在所蔵機関が多く、当時流布したことが窺える。その理由として、『格致余論』注釈本7種のなかでは『格致余論鈔』に次いで2番目と初期のものであり³³⁾、そのため、人気のあった『格致余論』を繙くのに当時、需要があったと考えられる。

一方で、『格致余論諺解』は『黄帝内経』などの古医経以外はさほど古典文献の引用を多用せず、一抱が解説をするというスタンスが多く見受けられた。『格致余論疏鈔』に比べ、出典を明らかにする作業にあまり重きは置かれていない。また、先の二書と同様、校勘作業はわずかしか見られない。一抱は臨床的な視点に重きを置き、古典引用を極力排した可能性がある。

元禄文化の特徴として、現実主義と実証主義の傾向が強いことがあげられるが、この時代に『格致余論諺解』を著した一抱にも、臨床現場で有用たりえる医書を目指した現実主義と、実際に使える理論を著そうとした実証主義の傾向が見られる。広田玄伯が座学的な研究としたならば、臨床的価値に重きを

33) 和刻本の注解書、すなわち『格致余論頭書』も入れると3番目となる。

置いた実践的な内容であったと位置付けられよう。

一抱の諺解シリーズといえば、分かりやすいことで当時好まれたようである。兄の近松門左衛門は一抱が著すこうした入門書・手引書があることで原書を読まなくなる人が増えることを危惧し、一抱に諺解シリーズを著すことを諫めたという逸話があるほどである³⁴⁾。

諺解シリーズのひとつ、『格致余論諺解』はそれまでに出版されていた『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』などといった注解書が漢文で著されているのに対し³⁵⁾、儒学を学び漢文が得意な者のみならず、幅広い層に読まれることを目的としていたのか、片仮名交じりの文体であることが読みやすく、このことも分かりやすいという評価の一つになったと思われる。

こうしたことから一見、エッセンスのみを抽出した簡便な読み物の印象を与えるかもしれないが、しかし『格致余論諺解』を検討した結果、一抱の注解は詳細で、内容も初心者向けにとどまっているとは思えないものであった。今なお所蔵機関が多いことから当時、相当数刊行されかなり流布し、臨床家など幅広く読まれていたと推察されるが、臨床的な側面のみならず、本稿で取り上げた養老論篇以外の篇を見ても、陰陽論や五行論その他中国哲学を踏まえるなど、中国医学理論の背景や根本部分もふまえている。つまり、実用のみ偏することなく、幅広く目配りをし、本質を保ったものでありながら、分かりやすく書かれているということが出来る。そして、三書のなかで最後の刊年を有す『格致余論諺解』は、先行の研究に目配りしつつも、独自の注釈をしていたことがいえる。

以上、本章で見てきたように、三書においてほぼ同じ内容の注が記載されているといったケースは見られなくもないが、基本的には各自オリジナルであり、差別化されている。このように、三書の注解者が『格致余論』の理論をどのように理解し、何に着眼して注を施したのか考察することで、各立場や考えがおのずと見え、本章では、最も深い中国医学受容を示すもう一つとして、『格致余論』解釈における三者三様の医者像が明らかとなったと思われる。

おわりに

本稿では、日本における『格致余論』に関する版本を確認し、そしてその和刻本・注釈本の書誌にふれた。さらに、そのなかから流布したと思われる三書を選び、その注解の一部を取り上げ、『格致余論』そのものの医学的内容をふまえつつ、各注解の理論理解のうえ、各書が『格致余論』のどの部分に着目し、どのような文献を引用し、いかに解釈をしたのかを比較検討することにより注解の傾向を探った。

まず、書誌学的情報から『格致余論』の受容状態を確認した。和刻本・注釈本ともに刊年のほとんどが1600年代であり、特に注釈本の刊年を考察した結果『格致余論』の受容のピークは1700年前後であった。

34) 「信盛笑曰……從一書事于諺解一吾恐ク後世末学因レ浅レ就レ近レ不レ復研一究セ本書一ヲ鹵莽施レ術ヲ至レ誤一ル一民命一ヲ孰謂レ非一ト子書為一レス一累ヲ哉一抱大ニ悟ル」 浅田宗伯『皇国名医伝』出雲寺文次郎他刊、1851年（嘉永4）内閣文庫蔵本影印『医家伝記資料』（青史社、1980年）巻上33葉。

35) ただし、これら三書より前に刊行されている『格致余論鈔』の注釈文は片仮名交じり文である。

次に、受容の一形態としてその注解を考察した結果、江戸前期において代表的な医書である『格致余論』の本稿で取り上げた注解書『格致余論頭書』・『格致余論疏鈔』・『格致余論諺解』三書の特徴が明らかとなった。

賀来道意注の『格致余論頭書』は、スペースが限られる「頭注」形式ゆえか、要領よく注が付されており、異国の医書を繙くのに面倒がない程度の簡便さである。広田玄伯著の『格致余論疏鈔』は、古典引用が多く、字義的解説など詳細な注釈を施しており、そのスタイルは江戸後期に盛んとなる考証学の先駆であったといっても過言ではあるまい。一方、岡本一抱著の『格致余論諺解』は、『格致余論疏鈔』が座学的な注解と位置付けられるのに対し、臨床的な注解と位置付けることができよう。

このように注解の内容を考察したところ、三書の注解者の立場や考えの差異も窺え、結果として、臨床の現場における実用性に重きを置く医者像、文献学的な研究に関心を寄せる医者像、実際的な臨床の内容を重視する医者像など、三者三様の医者像が明らかとなった³⁶⁾。

本稿では、日本に受容された『格致余論』という中国医書の注解を通して、のちに日本独自の医学を発展させてゆく前の姿をまだとどめ、積極的に中国医学を取り入れようとする江戸前期における中国医学の受容の一形態を提示できたと思われる。

36) 『格致余論諺解』より以前の『格致余論鈔』をも含めるなど、比較検討の範囲を広げて考察することを今後の課題としたい。

